

カウンター席

福井県立武生商業高等学校

村居 なるみ

私は兄の仕事をしている姿が好きだ。黒いTシャツに黒いズボン、膝より少し長いくらいのエプロンを腰に巻いてカウンターに立ち料理をする。きれいな黄色の分厚いだし巻き卵、キラキラ光る豚の角煮。兄の作る料理はすごく美味しくてきれいだ。特に、左ききの兄が作るお造りは、切り方が逆になるため他の人が作るお造りを鏡ごしで見てる様で見ただけでドキドキする。私はそんな兄と兄の料理を見るために必ず兄の目の前のカウンター席に座る。私だけの特等席だ。

しかし、あの日から兄はカウンターに立てなくなった。交通事故だ。意識不明の重体で事故から三日たっても目を覚まさず、医師から死ぬかもしれないと宣告を受けた。幸いにも事故から五日後に兄は目を覚ました。しかし、兄は私たちが知っている兄ではなくなっていた。泣きわめき、暴れまくり、ひどい時には私に殴りかかってくる日もあった。そんな状況に堪えきれなくなり、私たち家族は兄に精神安定剤を打った。その結果、兄とはまともに話すことができなくなり、兄の目に私たちが映ることもなくなった。ただ静かに涙を流しながらベッドに横になっている兄にひたすら話しかけるだけの毎日が続いた。

そんなある日、いつものように兄に話しかけていると兄は突然起き上がり、私を見て少し微笑んでこう言った。
——なる、寿司握ってやるわ。

もちろん、お寿司を作る材料も場所もなく、ましてや兄はベッドから降りることも困難な状態だった。しかし兄はお寿司を握り始めた。何もないベッドの上からシャリを取り、右手で器用に形を整え、左手でネタを取り人差し指と中指を乗せてまるでそこに本当にお寿司があるかの様に握っていた。私はベッドに乗り、兄の足下に座った。ベッドに備え付けられている白いテーブルの上に並べられた、透明のお寿司。まるで、いつものようにカウンター席に座っているような気分になった。

「いただきます。」

私は透明のお寿司を一つ取り、一口で食べた。兄は「うまい？」と聞いているかのように私を見ていた。

「すごいおいしい。」

私がそう言うと、兄は満足気に笑ってまた眠ってしまった。

兄が私だけに見せたほんの五分間の奇跡と楽しそうな笑顔を、私は心に焼き付けた。そして、兄がまた仕事に復帰することが私の“夢”になった。

その日の夜、家族に今日起こった出来事を話し、兄に精神安定剤を打つのをやめることを提案した。みんな少し驚きながらも、私の意見に快く賛成してくれた。その日からは毎日が大変だった。暴れる兄をなだめ、泣いていたらなぐさめ、毎日家族みんなで交代で病院に泊まり、兄に付きつきりになった。

ある日、学校の帰り道に母から電話が鳴った。

——なる！涼、元に戻った！

私はすぐに病院に駆け付けた。病院に着くと車椅子に乗った兄が出迎えてくれた。

「おう、なる。久しぶりやな。」

兄は、まるで何年かぶりに再会した時のように、嬉しそうに笑っていた。それから私は、兄とたくさん話をした。兄が眠っている間のこと、学校であったこと、兄の仕事のこと、今日食べるご飯のこと、いろんなことを話した。こんな何でもない会話に家族みんなが幸せを感じた。

そして二週間後、私の“夢”は叶った。私の大好きな兄の姿がカウンターにあった。カウンター席は兄の復帰を聞きつけたお客さんで満席。兄は楽しそうに料理をしていた。私はその光景を見て思った。いつか兄が店を出したら、今日のようにカウンター席までいっぱいになりますように。そして、あの時私に見せた満足そうなあの笑顔をたくさんの人に見せてほしい、と。